ルター新聞
Die Luther Zeitung
ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr.79

ルターと聖書の翻訳

フィンセント・ファン・ゴッホ
『開かれた聖書』（1885年）
ファン・ゴッホ美術館（アムステルダム）

聖書ほど、多くの言語に訳されている書物は他にないだろう。邦訳も数多くある。アイヌ語訳の聖書もある。東北の気仙沼方言で訳された聖書もある。しかし、キリスト教の長い歴史のなかで、中世期末まで、聖書の翻訳は一種類だけだった。ラテン語訳の聖書である。「ウルガタ」という。ラテン語が特権的に聖なる言語と考えられていたからである。

しかし、ルターは聖書をドイツ語で翻訳し出版した。民衆の言葉で訳したのだ。以来、聖書の各国語訳が始まった。聖書が、私たちの書物になったのだ。

コロナ、ウクライナ、旧統一教会問題、気候変動による災害等々……。世界の先行きが見えない。日々の暮らしに、いろいろ心配がつきまとう。こんな時、足元を照らす光、私たちを包む光が必要だ。それが、聖書である。時にやさしく、時に厳粛に私に語りかける言葉。今年は、ルターの聖書翻訳五〇〇年である。もう一度、聖書の言葉に耳を澄ませたい。（え）

今号の内容

2面　ルターの聖書翻訳
3面　〝ピスティス〟をどう訳すか？
4面　シリーズ「人間ルター」⑰
　～ビールを飲む人ルター
　ルターの名著『新約聖書序文』
5面　ルターと印刷・出版産業について
　ルターのことば
6面　本の紹介
　『小川修　パウロ書簡講義録』
　切手に見るルター㉟
7面　シリーズ
　「ルターとバッハとわたし
8面　研究所ニュース

ルターの聖書翻訳

所長　江口　再起

ルターは、私たちにとって信仰の人だが、ドイツ人にとっては少しちがうかもしれない。信仰の人であることはもちろんだが、更に自分たちの代表、つまり代表的ドイツ人なのだ。なぜか。それはルターが、今日の標準的なドイツ語をつくったと言えるからである。母国語が、その国民をつくる。ルターの当時、ドイツ語は地方地方の方言でバラバラであったが、ルターが聖書のドイツ語訳で使ったドイツ語が全国の標準となったのである。したがってルターは、教会史のみならず、ドイツ文学史、国語史上でも大きな存在とみなされている。

さて、今年はそのルターの聖書翻訳五〇〇年の記念の年である。そこで、その翻訳の意義について考えてみよう。

今日では、聖書は本屋で手軽に手に入る。しかし昔はそうではなかった。聖書は民衆にとって疎遠な書物であった。一五世紀の半ばにグーテンベルクによって活字印刷術が発明されるまでは、書物というものは一冊一冊、手書きで作られていた。写本である。その上、書物の大半はラテン語で書かれていた。ラテン語は法律や学問のための言語で、特別な訓練を受けた人たちだけの言語である。その上、そもそも当時の識字率は五～一〇％と言われている。したがって聖書を読んで理解するどころか、多くの人々は見たこともなかった。聖書は村や町の教会や図書館に、貴重な宝として盗まれぬように鎖で厳重に結びつけられていたという。つまり聖書は、一部エリートの人々だけの書物であったのである。

しかし、ルターは自らの体験を考えた時、聖書を実際に読み、その読書の中から神の心を知ることができたと感じていた。若き日の修道院の塔の一室で、ロマ書一章一七節の言葉を読んだ時、神の本当の心がわかったのである。聖書によって開眼したのである（「塔の体験」）。

さて、そうであるなら、ルターは人々が実際、自分で聖書を手にとって、わかる言葉で、つまりラテン語やギリシア語でなく、ドイツ語で読めることが大切であると考えていた。しかし改革運動の最中、翻訳の時間がない。ところが突然、時間ができた。諸般の事情により、ルターは半ば強制的に人里離れた山奥のヴァルトブルグ城に保護されたのである。というわけで彼はさっそく、新約聖書のドイツ語訳に取り掛かった。ルターは間違いなく語学の天才、ギリシア語で書かれている新約聖書全体を一〇週間で訳し終えたと言われる。そしてそのドイツ語訳聖書は一五二二年九月に発行された（「九月聖書」、更に一二月の第二版は「一二月聖書」といわれている）。一冊の価格は相当高く牛一頭分だったが、折からの活字印刷の普及の追い風の下、よく売れた（四年間で八万六千部）。なお、旧約聖書を含めた聖書全体の翻訳は盟友メランヒトンらの協力も得て一五三三年に完成。ともあれ、このルターの聖書ドイツ語訳が嚆矢となって聖書の各国語訳がすすんだのである。今日、私たちがわかりやすい日本語訳で聖書が読めるのも、元を辿ればルターのドイツ語訳聖書の翻訳があったからである。

さて、そこで問題はルターの翻訳がどんなものであったか、である。どんな翻訳方針だったのか。それを知るためには、彼の『翻訳についての手紙』（一五三〇年）が参考になる。この文書によれば、ルターは翻訳にさいして二つの方針を建てているように見える。まず方針の第一は、自然でわかりやすい翻訳であること。わかりやすさのためには二つのことが肝要だ。一つは誰もが使う言葉で翻訳すること。ルターはこう書いている。「家にいる母親、道端の子ども、市場の人々をよくみて、彼らの口の利き方に注意し、これに従って翻訳を進めねばならない」。そして、もう一つは、大事な箇所は強調して訳すこと。たとえば、聖書のギリシア語原文には「人は、信仰によって義とされる」と記されているが、ルターはそこを「人は、信仰のみによって義とされる」という具合に、原文にない「のみ（allein）」という語をあえて挿入して強調して訳している。意味が強調されると、わかりやすくなるのである。

ところが、である。方針の第二は、真逆である。わかりにくく訳すこと。どういうことか。ルターは言う。「（訳しづらい難解な）箇所を文字通り保存して、（原文の）文字からはみ出ることはしなかった。私はこの（原文の）言葉から離れるよりはむしろ、ドイツ語を破壊する方を選ぶ」。つまり難解なもともとわかりにくい箇所を、子どもでもわかるように訳すのではなく、あえてそのままわかりにくいままに訳すというのである。なぜか。考えてみればそもそも神の心は、人の思いをはるかにはるかに超え、そして深い。ソフトクリームをなめるように甘くやさしいものではない。神の言葉、すなわち神の心は、気高く深い。そもそも深遠、難しいのだ。人は安易な気持ちで近寄れない。聖書の言葉一つ一つに、全力をふりしぼってぶつかっていかねばならない。だからルターは、あえて難しく訳すという。

今日、歯ごたえのない食べ物や言葉が多い。幼稚化した世界。しかし、私たちの人生には険しい山があり、谷がある。その中を、聖書の言葉を灯として進みゆく。不必要に難しい言葉を使う必要はない。だが、聖書の言葉に立ちどまり、心の中で何度も何度も反芻して、神の心を悟っていくのが、本当ではなかろうか。ルターの聖書翻訳はそうなっている。

〝ピスティス〟をどう訳すか？
――『聖書協会共同訳』が問いかけること

立山　忠浩

身を潜めたヴァルトブルク城で新約聖書を訳したのが一五二二年初めのこと。ルターは一〇週間でギリシャ語からドイツ語への翻訳を成し遂げたことは周知のことである。翻訳は機械的な作業ではない。特に聖書の翻訳となると、訳者の思いや信仰の情熱が欠かせない。ルターも発見した福音の喜びを何とか人々に伝えようと奮い立ち、ドイツ人にはドイツ語の聖書が必要だと考えたのである。

福音の喜びの発見は新しい信仰の発見だったとも言えよう。神の義を獲得するために修道院で日々精進を重ねたにも拘わらず、喜びからはほど遠く、神を憎んでさえいた。しかしついに福音と出会う。その時のことを晩年に「神の義とは、義人が神の賜物によって、すなわち、『信仰によって生きる』、そのような義であることを理解しはじめた」と記した。これが「塔の体験」と呼ばれるもので、修道院の狭い一室で聖書を読みふけっていた時の発見である。神の義は自分の努力や功績で獲得するものではなく、「神の賜物」であり、それを受け取ることで義とされる「受け身の義」に他ならないことに気づいた。苦しみから解放されたのである。このことをルターは「信仰によって生きる」という表現を好んだが、これはローマ書一・一七の言葉であり、同時に筆者のパウロが旧約聖書のハバクク書二・四から引用した言葉である。

ここまでは私たちの知識のおさらいである。次に新たな問いを設定しよう。「信仰によって生きる」というときの「信仰」とは何であろうか。ルーテル教会に属する者は「信仰によって義とされる」という教えを知っている。それを「義認論」と言う。だから「私たちの信仰」のことであり「信じること」と言うことに迷いはない。でも、果たしてそう言い切れるのだろうか。

四年前に刊行された『聖書協会共同訳』[i]は、これまで「信仰」とほぼ統一して訳されて来たギリシャ語の「ピスティス」を一部であるが「真実」という言葉にも訳している。例えばローマ書一・一七には「初めから終わりまで信仰を通して実現される」（新共同訳）[ii]とある。ここにはピスティスが二回出て来るが、「真実により信仰へと啓示されている」と改訳した。同じピスティスを「真実」と「信仰」に訳し分けたことになる。さらにこれまで「ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」（ガラテヤ二・一六）と訳され、文字通り「信仰義認論」の根拠として来たところも「（義とされるのは）ただイエス・キリストの真実によるのだ」と改訳されている。義認の根拠が「私たちの信仰」から「キリストの真実」に移動したのである。義認の教理を「ひとつの不可欠な基準」（『義認の教理に関する共同宣言』）[iii]とするルーテル教会にとって無視できない変更である。

果たしてこのような訳が可能かどうか、まずギリシャ語文法上の問題があろう。その議論はギリシャ語や新約聖書学の専門家に委ねよう。ただ我々にとって看過できない問題があるように思われる。ヴァルトブルク城で新約聖書翻訳に尽力し、その中でもパウロ書簡の訳に情熱を込めたであろうルターの訳語が、極めて大きな影響を後代に与えて来たことである。それは偉大な功績であり、我々ルーテル教会に属する者は誇るべきであり、継承すべきことであろう。しかし当時のカトリック教会を意識するあまり、「功績ではない、贖宥状を買うことでもない」と考え、私たちの「信仰」こそが義とされる根拠であることに力点を置きて訳したことが、今日まで決定的な影響を与えて来たことを覚えなければならない。これが信仰絶対主義やキリスト教優越主義を生み、他宗教との対決構造を助長した側面を否めない。

「キリストの真実」、ある者は「キリストのまこと」と訳すが、この意味は、私たちが信じる以前に、イエス・キリストが生涯を通して証ししたこと、あるいは神の歴史を超えた出来事が私たちの救いを成し遂げていることにもなる。これこそが真の福音であるように筆者には思える。この解釈は私たちの信仰の意義を軽視しているような誤解を時として与えるがそうではない。「キリストのまこと」こそがルターの言う「神の賜物」であり、それを受け取り感謝の中に生きるためには信仰が不可欠だからである。これほどの重要な改訳がなされたのに、我々のルーテル教会内での『聖書協会共同訳』の評価を耳にすることはほとんどない。これこそが一番の課題なのかもしれない。

（所員　JELC都南教会牧師）

聖書を翻訳するルター

(Endnotes)

i　『聖書――聖書協会共同訳』（二〇一八年発行）

ii　『聖書――新共同訳』（一九七八年発行）

iii　『義認の教理に関する共同宣言』（教文館）

シリーズ「人間ルター」17

ビールを飲む人ルター

高井　保雄

中川浩之・画

ドイツには「ルタービール」の商標のビールがある。これはルターの名を冠することができる唯一の登録銘柄だそうだ。

事程左様にルターがビールを好んだことは著名で、酒にまつわる彼の逸話や格言も今日まで残されている。その代表格は「酒と女と歌を愛さない者は生涯愚か者のままである。」という評言だ（真偽は？）。

さて、生水は、ドイツに限らず、西欧では一般に飲むことができず、チフス等の伝染病の発生源にもなっていた。それ故に安全な飲料としてワインやビールが食事の際に供される食習慣が発達したのだ。

ワインは教会のミサでも用いられたが、その際信徒に配ると誤ってこぼすといけないという理由で、司祭が大きな聖杯になみなみと注がれたワインを一人で一滴残らず飲み干すことになっていた。

ワインを一度に大量に飲まねばならない司祭の健康を損ねないために、修道院で造られるワインは、絶えず品質が改良され、美味にもなっていった。それが今日の数多くの有名な修道院関連のワインブランド誕生の契機にもなった。

この事情はビールにおいても同様だった。修道院では、四旬節の断食期の栄養補給用の「液体のパン」として用いたり、巡礼者をもてなすため良いビールが求められたので、醸造技術が発展していった。

ルターがビールを好んで飲んでいたもう一つの、そして最大の理由は、彼の宿痾とも言うべき尿管結石症にあるようだ。

現代でも尿管結石には医学的に利尿が薦められているが、ルターは一五二六年以降、その生涯を閉じるまで二〇年間、間欠的に襲ってくる疝痛発作に悩み続けた。残された彼の利尿治療の記録によると、総計で二〇個以上の自然排石があったそうだ。ルターにとって、ビールは何よりの利尿薬だったのだろう。

（所員　JELC引退牧師）

ルターの名著

『新約聖書序文』（一五二二）

石居　基夫

一五二二年九月、ルターの新約聖書ドイツ語翻訳が出版された。二一年四月にヴォルムスの国会で皇帝カール五世によって帝国追放の刑を宣告された後、ザクセン選帝侯によってワルトブルグ城に匿われた中でなされた翻訳だった。実際には二一年一二月に着手して翌年二月には完成させているらしい。出版当初からドイツで最も広く流布され、今でも親しまれる翻訳となった。

今からちょうど五〇〇年前の、その出版にあたって書かれたのが「新約聖書序文」である。ルター自身、聖書にない文書を付加することが正しいこととは考えていなかった。しかし、あえてそのように出版したのには理由がある。当時の聖書はご存知のようにラテン語で書かれたものが教会や修道院にはあっても、一般の人々がそれを手に取ることはほとんどなかった。ルターの翻訳によって、いわば初めて聖書に直接触れる人たちが、正しく聖書を理解し、導かれるためにこの序文が必要とされたとルター自身が述べている。当時の教会の教え、「根拠のない解釈」が、福音を聞き取ることを困難にしていた窮状が、ルターにこの序文をあえて書かしめたと言ってよい。改革者として、人々にどうしても福音を伝えたいという思いが、この聖書の翻訳・出版という事業の目的であったことがよくわかる。

ルターの伝えたかった福音とは、キリストが、罪と死と悪魔と戦って、これに打ち勝ち、「罪に捕らえられ、死に苦しめられ、悪魔に征服されていたすべての人々を彼らの功績なしに贖い、義とし、生かし、救って、こうすることによって平和へと導き、再び神のもとへと連れ帰ってくださった」ことである。

この福音を鮮やかに示すことこそが聖書の価値であり、その光に照らしてルターは聖書のある文書をより高貴な書と呼んだり、あるものを藁の手紙などと呼んだりもしている。私たちには少し言い過ぎのように聴こえるかもしれない。しかし、それはこの序文において直接には書かない当時の教会への批判を暗に表した言葉と言ってよいだろう。律法や戒めを重んじ功績を求めることでなく、ただキリストの恵みへの深い信頼に生きるようにと、私たちを福音へと招いているのだ。

（所員　ルーテル学院大学学長）

＊テキスト

・「ローマの信徒への手紙序文」（『ルター著作選集』、教文館所収）

・「聖書への序言」（『キリスト者の自由・聖書への序言』、岩波文庫）

ルターと印刷・出版産業について

宮本　新

宗教改革の発端となる九五箇条の論題（一五一七年）は圧倒的に「ルターと信仰」の観点から理解されてきた。しかし「ルターと印刷・出版産業」という観点から見直すならば、そこには旧態の印刷市場を解体して新しい市場の創出者としてのルター像が浮上してくる。

贖宥状の大規模な普及にはサン・ピエトロ大聖堂の再建や対トルコ戦の戦費調達といった当時の複雑な事情も絡んでいた。教会は印刷業界の大口顧客であり、とりわけ一枚刷りの贖宥状は一〇万部単位の大規模な発注品であった。したがってルターの贖宥状への抗議は、神学的動機に根差していたとしても、それを介した政治（帝国）―経済（フッガー家）―宗教（教会）の仕組み全体をゆるがす行為であった。その後の宗教改革の展開は印刷産業にとって贖宥状ビジネスの凋落であり、ルターはその解体者と映ったに違いない。ところがそれは物語の半面にすぎなかった。彼らはすぐにルターというアイコンが新しいビジネスモデルになることを目の当たりにするからだ。歴史学者アンドルー・ペディグリーがブランド〝ルター〟を見出したのはこの脈絡でのことであった。

このことをもっとも印象付けたのは「免責についての説教」（一五一八年）のドイツ語出版であった。それはラテン語による聖職者や学者といったかぎられた人々ではなく、広く一般の人々にメッセージを直接届ける意図があった。この読者層の転換は成功し、説教はまたたくまに二二版を重ね人々に受け容れられた。それから五年の間さらに一六〇もの著作をルターは出版し、その三分の二はドイツ語であった。総計八二八版、出版累計部数は二〇〇万部に達した。そこでルターがこだわったのは言葉とその内容だけではなかった。印刷する形態（小冊子、四つ折りなど）の工夫や、のちにルーカス・クラナッハといった画家と協力したように表紙の装丁にいたるまで高い意識をむけた作品作りもまたルターの仕事になった。

このような印刷・出版の脈絡においてこそルター訳聖書の意義深さも再確認されることであろう。それはこんにちのような文字ばかりの聖書ではない。美しい装丁と挿絵が随所にみられるのは、むろん貴族趣味に高じた結果でもない。むしろ聖書とそのメッセージを広く深く、そして直接に人々に紐解いて届ける思想の具体化であり、その工夫の結果でもある。こうしてルター生存中に四〇〇版をかさねた聖書刊行は、世俗の印刷・出版業界の解体と刷新を介しながらも、福音宣教の熱意とその波及力の証言になっている。

（所員　ルーテル学院大学・神学校教員）

ルターのことば

これ（福音）を真剣に信じる人は、じっとしてはいられない。
彼は喜んでこのことを歌い、語って、人々に聞かせ、人々を招く。

『バプスト賛美歌集』序言（1545 年）　LW53:333

JELC 栄光教会牧師　伊藤　節彦

ルターは「神の言葉に次いで、音楽を最高にほめたたえる」と語り、音楽を神からの賜物と考えていました。そして「歌う者は二度祈る」という格言があるように、礼拝の時だけでなく、いつでもどこでも日常生活の中で賛美を歌うことで福音を証しすることを勧めたのです。ルターは賛美歌を「会衆の説教」とさえ語りました。歌われた福音は、自分自身にみ言葉を語りかけると同時に、世界に対して語りかける神の言葉となっていくからです。ルーテル教会が「歌う教会」と呼ばれる由縁です。

識字率が低かった中世の時代、カトリック教会はステンドグラスや荘厳な典礼を通して信仰を「視覚的」に訴えました。それに対し、ルターはみ言葉の説教と賛美歌という「聴覚的」な側面を大切にしました。なぜなら、視覚的なものはどちらかといえば外面的で、個人体験に軸足が置かれます。しかし、聴覚的なものは内面的であり、カイロス的な一回性をもちつつ他者との共同体性を含んでいます。

ルターの宗教改革は「礼拝改革」でした。ポイントは、礼拝とは人間が神に捧げるものではなく、神ご自身による人間への奉仕であるということです。神ご自身が私たちを礼拝に招き、み言葉を語りかけ、ゆるしを与え、聖礼典を授けてくださる。この恵みへの応答としての感謝と賛美と奉献が大切だというルターの考えは、会衆は傍観者ではなく参与者であるという自覚を促してきたのです。ですから自国語による会衆賛美、コラールの誕生は必然であったと言えましょう。

詩編は「新しい歌を主に向かって歌え」と告げます。新しい歌はどこで生まれるか？　それは試練や宣教の現場の只中です。誰と共に歌うのか、世界が苦しんでいる課題を自分たちのものとしていくのか。この問いの中で宣教の歌・証しの歌・信仰告白の歌としての賛美歌は、教会を新しくしていく力となっていくのだと思うのです。

（JELC 栄光教会牧師）

本の紹介

『小川修 パウロ書簡講義録』

（全一〇巻）

小川　修著

小川修パウロ書簡講義録刊行会編

二〇一一―二〇二二（リトン）

高井　保雄

本講義録は次の三点で希有である。

①小川修（一九四〇-二〇一一）の学問

氏は宗教哲学者だが、その学問は、日本の優れた神学者・哲学者の例にもれず、深い仏教的素養に裏打ちされ、キリスト教神学・哲学の領域に至る。

仏教の真理は「不立文字」とされるが、氏はこの境地に留まらず、「言葉は神である」というキリスト教世界に参入した。そこで「神の言葉」の神学者バルトや滝沢克己と出会うことになる。

滝沢は、哲学留学に際し、西田幾多郎に「神学者」のバルトを薦められた。所が驚いた事にバルトの『ローマ書』の中に「自己の思想の別の表現を発見（本講義録九-二五七頁）」し、それを「インマヌエル（神我らと共にあり）の原事実」と呼び、「ザッヘ（中核）」とした。そしてバルトが『ローマ書』の中で神の義をやはり「ザッヘ」とし、「イエスは神の子キリストである」をそれとする事と同定する。

氏は、この両者に多大な影響を被ると同時に、この両者の「ザッヘ」の同一性と差異性の解明に取り組む。その後「言語機構分析」により、氏自身のザッヘたる「信仰（ピスティス）」の考究を、パウロ書簡（ローマ書、コリント書、ガラテヤ書）の逐次解釈を通じて遂行していった。その結実が本講義録である。

②氏の希有な「ピスティス（信仰）」論

ローマ一：一七は『ローマ書』の主題とされるが、語句中の「ピスティス（信仰）からピスティス（信仰）へ」の意味理解は昔からローマ書全体に関わる大問題であり、ルターやバルトは、その新解釈によって新たな神学を築き得たのである。そして、氏もまた、この文言の解釈において、独自の地平を開いた。それが「神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ」という定式である。「神のピスティス」を「神の信仰」とは訳せないので「神のまこと」である。「まこと」が固有の日本語であることも奥床しい。尚、二〇一八年発行の『聖書協会共同訳』では同箇所は「真実により信仰へ」という訳で、氏の解釈との共同歩調が見られるのも興味深い。

③氏は、まさに、「まことのみ」、「聖書のみ」に生きた希有な信仰者である。日本のルーテル教会にこのような人がいたことを私達は忘れてはなるまい。

（所員　ＪＥＬＣ引退牧師）

切手に見るルター ㉟

世界文化遺産（一）

大分・別府・日田教会牧師　野村　陽一

ドイツにあるユネスコ世界文化遺産の中で、ルターに深く関連する遺産が二つある。共にルター都市と称するアイスレーベンとヴィッテンベルクにあるルター記念建造物群（1996年指定）と、ヴァルトブルク城（1999年指定）である。ヴァルトブルク城については、以前取り上げたが、今号のテーマに沿って、また未紹介の切手の紹介を兼ねて、再度取り上げることにした。

1521年4月のヴォルムス帝国議会を去ったルターが、ザクセン選帝侯フリードリヒ賢公の意により、ザクセン選帝侯領西端アイゼナハの山城、ヴァルトブルク城に入城したのは、同年5月3日だった。城は宮殿と管理人屋敷で構成され、ルターは騎士ユンカー・エルクという名で、管理人屋敷の一室に匿われた。現在でも、彼が新約聖書翻訳をしていたとされる部屋と隣接する一畳ばかりの寝室が公開されている。ルターはここで、1521年12月からわずか11週間で、新約聖書全体を翻訳し、完成後まもなく『9月聖書』と銘打って出版された。

横長の切手は2009年に国連とドイツが共同発行した同図柄の切手のうちの国連発行のもので、左側の図柄に城本体と、管理人屋敷へつながる長い回廊が、右側に管理人屋敷が描かれている。

縦長の切手は1966年、ヴァルトブルク城900年を記念して旧東独が発行したもので、ゴチック様式の管理人屋敷が描かれている。

シリーズ
〝ルターとバッハとわたし〟

切り絵：小嶋三義

アンドリュー・ウィルソン

私が初めてバッハの良さに気づいたのは神学生のときでした。ルターの勉強をしているのだから、ルター派の音楽についても学んだらいいと思い、すぐにCDを集め始めました。同時に、バッハ研究者であるロビン・リーバーの講義も受講しました。バッハのカンタータ音楽とテキストとの間に神学的な対話が存在することを説明する講義に、感銘を受けました。

バッハの教会音楽は、最高の芸術がそうであるように、比喩形象(figure)的な意味を何層にも重ねて描いています。一つの曲、一つのリブレットが、キリスト教の物語全体への入り口となるのです。

例えば、BWV一六一「来たれ、汝甘き死の時よ」は、やもめの息子の復活場面（ルカ七：一一-一七）に合わせて書かれた曲です。音楽は子守唄のように静かに始まり、テキストはライオンの死体から蜂の巣が発見された「士師記」一四章を暗示します。ライオンは死の象徴ですが、キリストにおいて死は甘美であり、何も恐れることはありません。レチタティーヴォでは、キリストの死の甘美さと世の中の残酷な茨が対比されます。弦のはじき出しがチクタクという時計の音のように「死の時」を描き、アルペジオの高まりがキリスト者の復活を伴います。

詩篇一一九編二〇節を暗示するアリア、そして一種の葬送の嘆きとともに、ライオンの口の中の蜜のように「死は勝利に飲み込まれる」（一コリント一五：五四）のです。そしてレチタティーヴォは世界に別れを告げます。時計がチクタクと最後の時を刻む中で、墓とライオン、バラと蜂蜜という比喩形象が並べられます。合唱では、一コリント一五：五三-五四にある「死なないもの」へのさらなる言及がなされます。そして私たちは、合唱のテキストにおいて現実的な死の時の描写に出会います。埋葬された死体は虫によって食い散らかされ、しかしその流血の上を美しいフルートの音色が飛び回る蝶のように飛び回るのです。誰もが、これが復活の比喩形象であると理解します。獅子から蜂蜜が、死から甘美さがといった具合にです。

ある人が、日本人にとってバッハは「バッハ教」であると述べています。このバッハ教はキリスト教になりうるのでしょうか。バッハのテキストと音楽をじっくりと研究し、感じ取ることができれば、私はそれは可能だと思います。バッハとの出会いは、聖書への、そしてキリスト教の信仰全体への道となるはずです。

（研究員　ルーテル学院大学・神学校教員）

日笠山 吉之

生まれてすぐにルーテル鹿児島教会で洗礼を受け、高校三年のイースターに福山教会で堅信した私が、バッハに初めて出会ったのは福岡に住んでいた小学生の頃だった。ピアノが好きで近所の先生からいろいろな曲を教わる中で、バッハの音楽にも触れた。最初はお決まりのインベンションやシンフォニアから、やがて平均律、イタリア協奏曲、パルティータ……と挑戦していったが、正直なところバッハと並んでドイツの「三大B」と称されるベートーベンやブラームスほどには好きになれなかった。おそらく当時の私には、バッハの音楽は難し過ぎたのだろう（今でも十分に難しいが）。

そんな私がバッハに目覚めたのは、大学の教育学部で音楽を専攻し、そこでバッハに詳しい友人と出会ってから。彼は、それまで私が知らなかったバッハの世界を教えてくれた。毎晩のように彼の下宿に転がり込んでは、カセットテープに録音されたバッハの声楽作品を二人で貪るように聞いた。やがて大学を卒業した私は、音楽の教師として教壇に立ちつつ、休日になるとバッハの教会音楽を歌う合唱団の練習に足繁く通うようになった。仕事に疲れていた教師時代、礼拝で語られる御言葉とバッハの音楽が私を慰めてくれた。

それから数年後、献身を志してルーテル神学大学に編入した。そこで、今は亡きエロイス・デール先生からパイプオルガンの手ほどきを受け、湯口依子先生から最新のオルガン奏法を教わった。神学校在籍中は、もちろんルターについてもそれなりに学んだ。そうして、ルターの言葉に触れ、バッハの音楽に身を浸す中で、両者が分かち難く結びついていることが少しずつ分かってきた。卒業論文も徳善義和先生のご指導の下、バッハの『クリスマス・オラトリオ』の譜面をたくさん載せて、ルターとの関わりの中で執筆した。それから牧師となってはや四半世紀。ルターの本はさほど増えない代わりに、バッハのスコアとCDはますます増え、チェンバロまで買ってしまった。今は仕事の合間に、フラウト・トラベルソを嗜む友人と一緒にバッハを演奏するのが最高の楽しみである。これからの人生も、ルターの神学を支えに、バッハの音楽を奏でながら、歩んでいきたい。

（JELC札幌教会牧師）

研究所ニュース

コロナ、ウクライナ、温暖化、政治と「宗教」の関係などなど、時代が大きく動いている事を感じます。こうした時代の変動の中で、ルターを学ぶことの意味も問われています。「ルターが今、この時代に生きていたら！」と、問いながら研究所の活動もすすめられています。

さて、今年はルターのドイツ語訳聖書五〇〇年に当たります。聖書こそは、ルターの宗教改革運動の原点です。しっかり心にとめたいと思います。

●牧師のためのルター・セミナー

五月三〇～三一日、オンラインで開催されました。主題は〝コロナとウクライナの時代〟。プログラムは以下の通り。「ルター『軍人もまた救われるか』を読む」（高村敏浩）、「ルター『トルコ人に対する戦争』を読む」（立山忠浩）、「東方教会とウクライナ」（多田哲）、「戦争を神学する～ルターとボンヘッファー」（江口再起）、「難民支援～ＬＷＦの働き」（宮本新）。各発題の後、全員で討論。戦争、ルターと二王国論、祈りの大切さ、原発問題等々、活発な話し合いとなりました。約四〇名の教職の参加がありました。なお発題要旨は秋に刊行予定の「ルター研究」一八巻に掲載予定です。

●第二回合同研究会

ルーテル学院大学は、キリスト教・臨床心理・社会福祉の三つの専門分野をもっていますが、ルター研究所の呼びかけで、八月二五日、オンラインで合同研究会をもちました。テーマは「今、専門職における人間学の課題」。神学部門からは宮本新先生、臨床心理部門からは石川与志也先生、福祉部門からは浅野貴博先生が発題しました。分野はちがえど、常に〝人間〟を問うていることでは共通しています。それぞれこのテーマをめぐる専門的な発題をききつつ、議論を重ね、刺激的な研究会となりました。

●公開講座

二〇二二年度後期の講座は「ルターと聖書」（担当・江口）です。コロナのため、受講対象者は神学生・学院生です。

●献金の感謝とお願い

ルター研究所への、皆様のご支援と献金、心から感謝します。

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（一〇〇万円）と皆さんのご支援（約一五〇万円）で成り立っています。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研究所）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さまのご理解とご支援をよろしくお願い致します。　（所長　江口再起）

《ご案内》ルター研究所クリスマス講演会

“ルターの聖書翻訳　五百年”

今年は、ルターのドイツ語訳聖書五百年です。ルター研究所では、この年を記念して、12月11日（日）の午後、全国オンラインでクリスマス講演会を開きます。ぜひご参加ください。

＝プログラム内容＝

◆ 講演「中世後期の聖書の世界」（高村敏浩牧師）
◆ ルターのクリスマス賛美歌（演奏）
◆ シンポジウム「聖書、ルター、翻訳、そして現代」
（立山忠浩牧師、李明生牧師、安田真由子さん）

近刊予告　「ルター研究」第18巻（ルター研究所紀要、リトン発行）

特集（1）ルター『マグニフィカート講解』500年
・江口　再起「待つということ―ルター『マグニフィカート』によせて」
・滝田　浩之「ルター『マグニフィカート』紹介」
・多田　　哲「ルターとマリア」
・安田真由子「連帯から生まれる社会変革のことば―マリアの賛歌のフェミニスト批評」
・加藤　拓未「バッハ『マグニフィカート』について」（仮）

特集（2）ルターと戦争
・高村　敏浩「よい市民、よい隣人であれ―『軍隊もまた救われるか』」
・立山　忠浩「『トルコ人に対する戦争について』を読む」
・江口　再起「戦争を神学する―ルターとボンヘッファー―」
・石居　基夫「ルターの聖餐理解と現状の教会」
・宮本　　新「教会は何を信じ伝えるのか？―UMGとその信仰の構造理解を手掛かりに」

ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三―一〇―二〇
電話　〇四二―三二―四六一一
発行責任：江口　再起（所　長）
e-mail：Luther-studies@luther.ac.jp